

あの立派な青竹も幾つかの節を重ねて伸びて行く、人の道にも節がある、この節こそ大切な節にして、その第一の節は親には孝という節があり、第二は夫に対しては貞という節であり、第三は子には愛という節である。この三つの節を良く守り、青竹の如く一生の心の玉とするなれば、願は達成出来るぞよ」と言いおいて老人は滝の彼方へ消えてしまった。

さて話は変わって名主の家では大変な騒ぎが起こった。日頃は頑固で丈夫な名主様が一寸した風邪がもとで段々病気が重くなり、医者や薬となりあらゆる手を尽くしたが何の効果もなく、日に日に病は重くなるばかり、家族の人達はもとより医者も手の施しようがなく、明日ともいえぬ命となり、家族の人も医者も只々頭を寄せて神に祈るのみとなった。この話を聞いた乙女は今追放されている身ではあるけれど、永い間、大恩を受けたご主人様なれば、こんな時のお役に立ちたいと、乙女は再び横谷峡入口の滝の御不動様にお願ひし、主人の病が治るように思い立ち、人目を忍び真夜中に滝の下に登り来てごうごうと響く白滝の滝のしぶきで身を清め、真心こめて神様にどうか主人の病気が治るようお救い賜えと手を合わせ念じ念じているうちに、かすかに神の暗示あり、「この滝の川裾に行けば、その川端に親草は枯れているが、よく見ればその草の根に青く太った芽の出た株がある。その草の根を煎じて吞ませれば必ず病気が治るぞよ」と示された。乙女は急ぎ川裾へ来て見れば、青く太った芽のある草の株が、ここ彼しこに見えたので、ああ有り難い神様と感謝して我が手から血の出ているのも知らずして、この薬草を掘り集め、喜び急ぎ持ち帰り、今は追放の身ではあるけれど、旧主の病が治るまで、と事情を話して頼んだら御家族の方々も許して下さるか、と意を決し、先ず女中頭の部屋へ行き事の次第を話した。女中頭も喜んで早速家族の方々に相談したところ、最初は信じてくれなかったが、家族の人達も看病に日を重ねてきたために皆がすっかり疲れ果てている事と、神のお示し下された薬草と聞いたので、名主の病気が直るものならば少しの間、乙女に看病させて見ようかと内輪の話が纏まったので、早速、乙女を呼び寄せて心を尽くして看病するようにと言ひ渡した。乙女は喜び必ずや主人の病を私がこの手で直してあげようと心の奥に鞭打って神のお与え下されたこの薬草を日夜の別なく煎じては投薬していると、医者も駄目だと言った病人が真心こめた看病の甲斐あって実に不思議や主人は意識を取り戻し、薬の効果もあらたかに一日と回復してきた。

気を取り戻した名主が、よく見れば枕辺に乙女のいるのに不思議と思ひ、家族の者を呼び寄せて、どうした事かと聞いた。家族の者の話には、医者も薬も効果なく貴方の命は生死の境にあつた時、それを聞いた乙女が神かけて今日まで真心尽せし看病で貴方の命が助かった、と一部始終を話した。これを聞いてさすが頑固の名主も心から反省し、今まで家柄などにこだわっていた自分が恥ずかしい、真心ほど尊いものはない。一度は手打ちにまでと憤慨し、追ひ出した乙女が、主人の恩を忘れずに神かけ願ってくれたのだ。心から尽くしてくれる人が家の為になる人である、こうした乙女を息子が見込んだのも無理はない。そこで早速、家族の会議を開き、まず名主から発言があり、「息子に嫁を貰ってやりたいが、家柄という物は二の次だ、家の為に尽くしてくれる人が第一だ。そこで我が家の嫁に乙女を迎えたいが如何か」と案を出した。もちろん誰一人意義を言う人は無く、一族満場一致で話は決まった。そこで早速仲人を立て先方様へ申し込んだところ、身分は天と地ほど違いはあるが承知で貰つて下さるならば、と話は丸くまとまって、吉日を選び目出度く祝言が挙げられた。

兎角世間では嫁と姑の仲の悪い話が多いものだが、嫁が来てから名主の家からは何時も笑いの声が聞こえ、嫁が良ければ姑も我が子のように可愛がり、夫婦の仲は睦まじくも互いに愛し合い、まもなく家の宝物、玉のような男の子が産まれ、一家はいよいよ団欒、世間の人に羨まれ、家は益々繁盛して世間の噂は高くなった。嫁が良ければ家中が良くなり、さすが頑固の名主も良くなった。主人が良ければ使用人まで和氣藹々として働ける。名主の嫁の評判は次から次と伝わって、村の嫁や娘達も見習えというほど村人達の良きお手本となり、三の節の教訓は村全体の守り神と信じられ、習ひ覚え行えば何時しか村の娘達も名主の嫁と変わりなく、花の蕾と例えられ、今を盛り売り出しのこの村の娘達は、網の目から手の出るように嫁にするならこの村から、と次から次へと望まれてお断りするのが一苦労という有様であった。名主の家を見習えば村全帯は晴れやかに、笑う家戸には福来ると村の各戸は繁盛し、名主の家も繁盛した。

乙女の恋が叶つたのも、名主の病気が治つたのもみな乙女滝の御利益と、こうした話が忽ちに村から村へと伝わって乙女滝の名は全国に知れ渡り、良縁を求め人、病気を治す願ひの人、其他多くの願ひをこめた人々がこの滝を訪れ、滝を潜って祈願する人々跡を絶たず、こうして多くの良縁が結ばれているという。

文・篠原寛

